

第5分科会 難聴・言語障がいのある児童生徒への指導

テーマ 「教育的ニーズに応じた難聴・言語障がいのある児童生徒への指導」

提案2 「ラ行音作りとラ/ダ行音弁別能力の育成」

発表者	愛媛県 四国中央市立土居小学校	教諭	中村 直子
司会者	愛媛大学教育学部附属特別支援学校	教諭	福岡 幸恵
助言者	岡山県立岡山聾学校	副校長	高見 晴寿

I 実践に当たって

1 四国中央市の通級指導教室の概要

四国中央市は、愛媛県の最も東に位置する。通級指導教室は、小学校に10教室、中学校に2教室が設置されている。月に1回程度合同研修会を開き、行事や指導について相談・連携しながら、共通認識の下、教室運営を行っている。構音指導についても、指導方法が研究され引き継がれている。

2 新型コロナウイルス感染症対策の中での構音指導

令和2・3年度は、新型コロナウイルス感染症対策をしながらの構音指導を行った。今回の指導は、アクリル板を隔てて座り、児童はフェイスシールド、指導者はマスクを着用したままで指導したものである。そのため、通常であれば、指導初期に行う呼気練習は、今回行うことができていない。指導者の口元の手本はあらかじめiPadで録画しておき、口の模型で示すことと合わせて伝わりやすいようにした。



3 指導のねらい

構音に課題がある児童は、話してもうまく伝わらなかつたり、聞き取ってもらえなかつたりして、自信をもてずにいることが多い。書いた文字の間違いを指摘されてもどう違うのかが分からなくて苦手意識だけが増してしまう。そんな児童が正しく発音できるようになり、生き生きと話したり書いたりすることができるように指導する。

II 実践内容

1 児童の実態

事例1 A児	事例2 B児
ラ行音→ダ行音のみ置換が見られる	ラ行音以外にも置換が見られる
1年生女児。就学前療育はなし。 舌小帯短縮症の疑いなし。 置換：ラ行音→ダ行音（ルはOK） その他の構音課題はなし。 音の獲得から文字への変換が苦手。	1年生男児。就学前療育はなし。 舌小帯短縮症の疑いなし。 置換：ラ行音→ダ行音 キ音→チ音、ギ音→ジ音 ケ音→チェ音、ゲ音→ジェ音 ス音→シュ音（時々）

	<p>ゼ→ジェ、ゾ→ジョ（時々） ツ→チュ（単音はよし） ズ→ジュ（単音はよし） シャ行音→サ行音（シはOK） ヒヤ行音→シャ行音（ヒはOK）</p> <p>自分が作っている音の自覚は苦手。 多音節模倣困難あり。 食べ物の好き嫌いがあり、口や舌の感覚 があまり鍛えられていない。</p>
--	--

2 指導の実際

(1) 指導の流れ

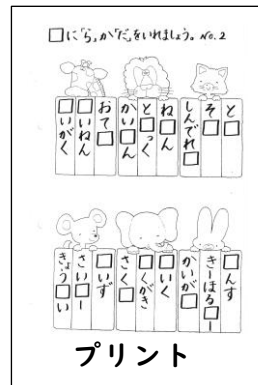
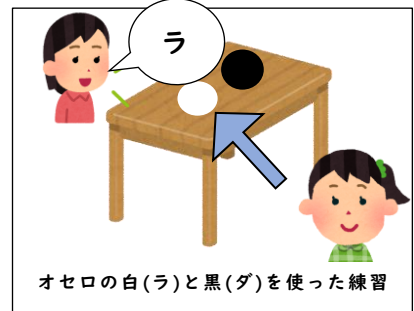
2名の児童は、週1回通級し、年間を通して以下の流れを実態に合わせて
組み合わせながら指導を行った。

A 児	B 児
<p>① 発声発語器官の機能を高める運動</p> <p>ア) おくちの体操</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顎を上下や左右に動かす。 ・唇を尖らせたり横に引いたりする。 ・唇を閉じて頬を膨らませたりへこませたりする。 ・口を開けて舌をコントロールして動かす。 ・舌を広げて前へ出す。 	<p>イ) したうち ウ) ホッピング エ) 4つの舌</p> 
<p>② ラ音の構音指導とラ/ダ弁別</p> <ul style="list-style-type: none"> ・耳の訓練（ラ音とダ音の区別） ・単音作り ・無意味音節練習 ・単語練習（絵カード中心） ・短文練習（音読） ・ラ/ダ連続言い分け練習 ・単語内でのラ/ダ弁別練習 ・表記の指導 <p>③ レ音の構音指導とレ/デ弁別</p> <p>④ ロ音の構音指導とロ/ド弁別</p> <p>⑤ リ音の構音指導</p> <p>⑥ 日常化練習 会話、作文など</p>	<p>② 耳の訓練（ス・ツ・ズ・ジュ音）</p> <p>③ キ・ギ・ケ・ゲ音の構音指導（ゲ⇒ケ⇒キ・ギ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単音作り ・無意味音節練習 ・単語練習（単語集、ポケモン図鑑） ・短文練習 <p>④ ラ行音の構音指導（ラ・レ・ロ⇒ル⇒リ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単音作り ・単語練習（ポケモンの名前中心） ・短文練習 文字を見て読む <p>⑤ ラ行音とダ行音の言い分け練習</p> <p>⑥ ラダ・レデ・ロド音の単語内での弁別練習と表記の指導</p>

(2) 児童の実態に合わせた指導の工夫

① 事例1 A児の指導

- 口や舌の筋力の柔軟性があり、上達があったため、舌先の巧緻性を高める運動を多く取り入れた。ラムネやチョコの粒など、小さいものを口の中で転がしたり、風船ガムを膨らませたりした。
- ラ音を作るために、まず、耳で聞いてラ音を聞き出すトレーニングから始めた。文字は使わずに、物や色で示したラ音とダ音の聞き分けを行うことで、文字ではなく音のみに注意を向けさせた。
徐々に文字と一致させ、ラ音の付く言葉を、新しく覚え直していった。
- 舌のコントロールがよく、音作りはスムーズだったため、弁別練習を十分に行った。



② 事例2 B児の指導

- 自分の舌の状態をつかむことが苦手だったため、舌全体の筋力アップを図り、顎や唇、舌の動きをスムーズに行うことができるための練習を大事にした。お菓子をなめたり奥歯で噛んだりするうちに、だんだん顎が左右に動くようになり、舌を広げる、尖らせる、指示された場所を触るなどがスムーズにできるようになった。そして、口形を保って音作りができるようになった。
- 自分が作る音に対する認識の苦手さが大きかったため、児童の取り組みやすさを考えて、時々正しく発音することができていたス・ツ・ズ音を使って耳の訓練を行った。一つ一つの音に意識を向けることができるようになった。
- 音作りは、構音能力の発達段階に従って進めた。自分の舌の動きを感じ取り正しい構音点をつかむために、チョコクリームを使用した。新しく作る音は、初めは「ge」や「ra」のようにローマ字表記すると、これまで作っていた音と区別しやすかった。
- B児には、新しく作った「ge」を単語内のどこで使うかを視覚的に示した方がよいと考え「一番最初だよ」とか「3つの音の



<視覚提示資料>

一番最後だよ」などと示しながら練習した。音作りが進むと、大好きなポケモンの名前を言う学習にも意欲的に取り組むようになり、正しく発音できる喜びでさらに発音の定着が進んだ。

Ⅲ 成果と今後の課題

1 成果

「発声発語器官の機能を高める運動」や「耳の訓練」を丁寧に進めることや、一人一人のどこを強化するのかを明確にすることで、児童が負担なく、早期に正しい構音方法を獲得することにつながった。また、正解したら遊びグッズを手に入れられるなど、成功を目に見える形にすることも児童の成就感につながった。児童は、ラ行音を見つけるたびにうれしそうにはっきりと発音したり、音の誤りを指摘されても前向きに訂正したりする姿が見られるようになった。正しい構音を獲得することが、自信をもって話すことにつながり、明るく人とコミュニケーションを図って生活できるようになっている。

2 課題

ラ行音とダ行音の聞き分けが難しい場合には、音韻認識に弱さがあると考えられる。拗音や促音などの特殊音節にも苦手さがあったり、似た音を間違えて認識したりすることがある。学習や生活において、音の認識の弱さに配慮した指導や支援をしていくよう働き掛ける必要がある。

〈指導・助言〉

本実践に関わる「感染症対策を行いながらできる呼気練習」について指導助言を行いたい。

現在のコロナ禍においては、今は何ができるかを見極め、できることを整理した上で、少し中長期的視点も取り入れながら指導計画を作成し、指導していくことが大切だと思われる。例えば、構音指導に当たっては、従来から「耳を鍛える」ことの重要性が言われており、このような時期にしっかり取り組むこともその一例になる。また、本実践では、感染症対策として、児童がフェイスシールドを使用しているが、構音指導や呼気練習の時には、常時換気の下、マスクを着用するようにすることで、感染リスクを低くすることができ、指導機会の幅が広がる可能性がある。

通級指導教室（言語障害）は、構音や吃音、ことばの発達など、ことばや発音等に関わる教育的ニーズに対応するための教室であり、子供に一人一人の実態や課題に応じた指導が確保される大切な場である。また、子供たちが、自分自身に向き合い、受け止めながら、自信をもって学校生活や社会生活を送っていく上でも重要な場でもあり、これからも、子供たち一人一人の教育的ニーズに応じた指導に取り組んでいきたい。